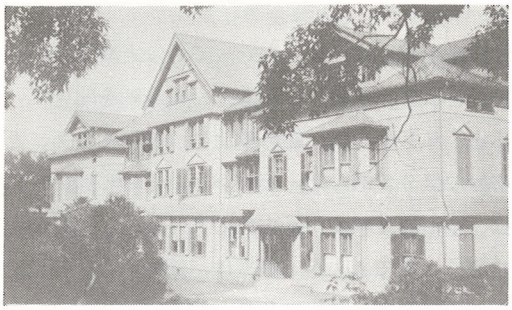
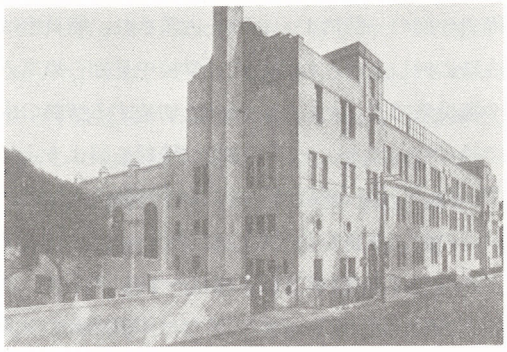
史料室だより No.4

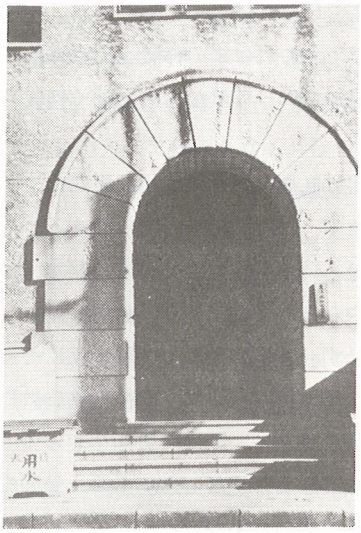
東洋英和女学院史料室委員会
発　行　１９７８年９月１日



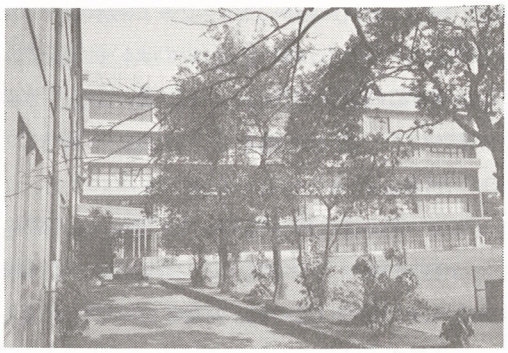
１８９９（明治３３）年 東鳥居坂新校舎落成



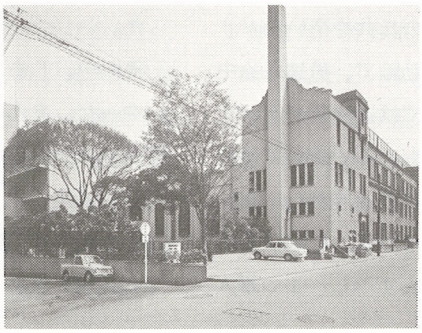
１９３３（昭和８）年 現高等部校舎落成



１９４０（昭和１５）年 東洋英和を東洋永和と改められた。その後、防火用水が玄関前に置かれた。



１９６２（昭和３７）年 新校舎落成
現在、中学部校舎



現　在

軍隊に出動を命ぜらる

岩　原　さかえ

６月の中頃、３年生は急に軍隊に配属を命じられた。その頃学校は、大空襲で兵舎を失った東部軍司令部の一部に１・２階を占領され、職員室は３階に押し上げられていた。学校中見知らぬ軍人や罹災者でごった返し、刻々と切迫する情勢の中で誰も彼も血走った目で確実な情報を得ようとしていた。しかし職員が一堂に会する機会もなく、いつの間にか姿を見せなくなった人々が、どこでどんな苦労をされているのかも一向に判らず、学校に足場の近いごく少数の者だけが顔を会わせる毎日になっていた。焼跡整理にうんざりしていた私達にとって、軍隊勤務は気分転換のよいチャンスであり、それに敵が上陸して来ても軍の中にいれば安心だろうと、楽天的な虫のよい希望を抱いて３年２組の逃げ残り２０余名は喜び勇んで私に引卒されて、麻布中学校に駐屯している軍隊に通うことになった。

麻布中学の焼け残った校舎の一部に、幹部候補生上りの中尉以下７名ばかりの兵隊と、３名程の女の軍属が駐屯していた。兵隊の名で顔と名をはっきり覚えているのが船戸軍曹と上田軍曹と植草軍属の３名である。朝８時に中尉の前で朝礼があった。宮城遙拝の次に軍人勅諭を暗誦する。「我国の軍隊は世世天皇の統卒し給う所にそある。昔神武天皇躬つから大伴・物部の兵共を卒い云々」に始まるいやに長ったらしい勅諭で、男達も途中で何度か絶句し、あげくの果ては途中でポケットから手帳を出して朗読する者もいる。そして最後に、１つ軍人は忠節を尽すを本分とすべし　１つ軍人は礼儀を正しくすべし　１つ軍人は武勇を尚ぶべし　１つ軍人は信義を重んずべし　１つ軍人は質素を旨とすべし　といってやっと終るのだ。鉢巻をして軍人のうしろでそんな暗誦を聞いていると、私も変な所に勤めるようになったなあ、と奇妙な気分であった。それから始まる私達の仕事は、うづ高く積んだ長方型の赤い紙に、召集令状を書くことであった。彼等は戸籍簿の写しを何冊も持って来て、首をひねりながら頁をめくり、「そうだなあ、今日は、こゝからここ迄、ゆっくりと間違えないように書いて貰おうか。」と言うのだ。そして、これは軍の作戦上の大事なヒミツだから絶対に口外してはならぬと固く何度も誓わされた。

帳簿の字は乱暴な大人のつづけ字なので生徒達はよく読めず、一々私の所に持ってくる。斉藤だの後藤だのという名前のくせのある略字は、私にも判読がやっとの場合があり、住所なども数字がはっきりせず、ましてやこの焼野ヵ原にそんな所番地があるようにも思えず、闇夜の鉄砲数打てば当る式の令状書きに、国は今更何をやってるのかと内心呆れてしまうのだった。その上勉強をしていない生徒の字の下手なことといったらお話にならない。余程注意して見てやらないと金釘流の誤字だらけ、この赤紙を“名誉のお召し”と感泣する人の武運が長久である筈はないと慨歎したくなった。

その中、「あら、この人家の隣の小父さんよ。いやーだ。あんな年とってる人」とつぶやいて周囲を見まわしてあわてて口を押える生徒が出て来た。兎に角、本土決戦にそなえて、男という男に動員令をかけているらしいのだ。私はこの分では、５０を過ぎた父の所にも令状が来るのではないか

という不安を覚えた。

しかし帳簿も次第に減って１ヵ月もすると仕事はなくなった。しかし私達は毎日出勤して「仕事をさせてくれ」と軍人を責める。そこでカンジンヨリを作れという命令になった。和紙の帳簿を細かく切って、生徒一同明けても暮れてもカンジンヨリを作るのだが、字が下手なように、撚るそばからほどけてぐんにゃりと折れ曲るカンジンヨリばかりを作るので、「君達は本当に仕様がないヤツだなあ」と嘲笑されるだけである。そこで、「もう作業止めえ」と号令がかゝり、船戸軍曹の御指導で、「銭まわし」をすることになった。軍人も軍属の女も入って一同ぐるりと輪を作り、「見よ東海の空あけて」という愛国行進曲で銭まわしをする。歌が一節すむと、鬼が新聞紙を丸めた刀で、銭の入っていそうなこぶしを上から叩く。「キャァー」「キャー」とせまい兵舎は大騒ぎだが、中尉は部下の騒ぎを見ながら、いつも頭を抱えて、ふさいでいることが多かった。溜息ばかりついて目を閉じている中尉に代って、指導権をふり廻しているのは、柳橋の料亭の息子だという船戸軍曹で、彼は実に女の子達を遊ばせるのが上手だった。

軍人勅諭の後は遊んでばかりいた或る日、船戸軍曹は、「どうせ仕事はないのだから、明日は、トラックで神宮の外苑プールに泳ぎにゆく」と言い出した。生徒達は歓声をあげ乍ら私の方を振り向いた。「ね、先生も一緒に泳ぎませんか」と軍曹は言う。私は義勇奉公はこの時ぞとばかり、「いいえ、いけません」を主張した。海水着を焼いた者は、金太郎さんが胸につけている腹掛けを明日迄に作って来ること、などと船戸軍曹は大張り切りだが、私は苦りきって、「いつ空襲があるか判らない昼日中、泳ぐなどとは、もっての他」を言い続けた。すると軍曹は「軍の命令」とか「軍に反抗する」とかの言辞を奔しておどしにかかった。そこで私は、「長野先生か光明先生の御意見を聞いてからにしてほしい」を主張し、全身汗にまみれ乍ら鳥居坂を駆け登って英和に戻り事の次第を息せききって報告し、「とんでもない」という返事を持って再び勇んで帰って来た。その日は一日生徒も軍人も、私に背を向けて不機嫌であった。私は、そしらぬ顔をして、昼休みには相変らず救急袋から讃美歌をとり出し、生徒達と、“美はしの白百合”とか、“くしき平和よ”などを声を張り上げて歌うのだが、船戸軍曹が蔭で、「先生は反戦思想の持主に違いない」と悪口を言っていた、とすぐに知らせに来る生徒も居たが、肝心の中尉さんが、「日本はどうなるのか、いや、しかし……」と相変らず頭を抱えて、天井を仰ぎ歎いてばかりいるので、何事も表沙汰にならずにすんだのは幸いであった。昭和２０年の夏、焼跡には鉄道よもぎの白い花が群り咲き、焼けただれた筈の立木にも逞しく緑が茂り蟬がしきりに鳴いていた。“銭廻し”にも飽きた頃、大きな軍用トラックが２日程、麻布中学校の入口に横付けになって、兵達が大荷物を積み出していた。軍は奥多摩の五日市の方に近く疎開する。東京は間もなく全滅するから生き残りたい者は誰でもついて来い、と言う。「私の家ではお前だけでも五日市にいって生きのびて来い、と言うのです。」と口々に訴える生徒もいて、今度ばかりは、神宮プールの時のように制止するわけにもゆかない気がした。船戸軍曹は「五日市で皆とたのしく銭廻わしをやろうよ」などという。これは大変なことになった、丁度、学校から緊急に集まるよう命令があったので、その時に相談しようと、急いで学校に戻って職員室で聞いたのが、終戦の玉音放送であった。

終戦前後の思い出

昭和２０年３月１１日 深川方面大空襲の翌朝撮影
後列の右端が沢池好江さん（５月２５日戦災死）

昭和２０年８月１５日、一たんは麻布中学校内の軍隊に出勤し、学校からの命令で１２時近く、生徒達と学校に出かけた。当時父が日本基督教団につとめていて、賀川豊彦氏から得た極秘情報として無条件降服のことを２・３日前から聞かされていたが、当時この他いろいろな怪情報が乱れとんでいたので半信半疑であった。学校では、長野先生と光明先生が先頭に立って、３階に移してあった重要書類を地下室に搬入する仕事の最中で、正后の重大放送は敵の上陸にそなえて一億総決起の覚悟を促がす陛下のお言葉である、という予測のもとに、緊迫した雰囲気であった。軍隊が一階を占拠していた当時、滅多なことは口外できず、互いが摑んでいる異なる情報を、あからさまに交換できる折は滅多になかったのだ。正后、三階の教員室のラジオの前に集った人の名を今ここで正確に記すことは難しい。玄関の前で記念撮影した大きな写真が残っているので一応その人々が当時の専任職員だったといえよう。私の古いアルバムのその写真には、「昭和２０年７月２４日（早朝より戦爆連合にて敵機の乱れとぶ凄い日）学校の教員室も軍隊に渡すため三階の裁縫室に移るのを記念して撮る」とあり、面々は、長野（院長事務取扱）、光明（教務主任兼教頭　英）　富士（歴史）　松島（生物）　倉長（英）　小林（音）　岡本（数）　前田（数）　清水（家）　矢川（体）　山田（裁）　川島（英）　中木（図）　佐々木（庶）　岡（会計）　川上（寮監）　比屋根（国）の１７名であった。遠隔通勤の人や、扶養家族を抱えて罹災した人などが、学校を愛しながらも、全く止むを得ない家庭事情で郷里の縁故を頼っていつの間にか姿を消しておられた。職歴の古い先輩の先生方の代りに、勤続二・三年の未熟な私達が、責任を持たされていたのも異常な時代の副産物であった。

玉音放送が終ると一同は茫然と佇立したまゝだった。私は生きのびることができたという喜びで頬がゆるみそうになり、友人と抱きついて躍りたかったが、長い間真実を押しかくす習慣が身についてそんなはしたないこともできず、そんな自分に一方では腹が立っていた。すると光明先生が足早に教員室を出てゆかれた。私はこの聰明な先生に傾倒していたから、一体この際、先生がどうされるかを、この目でたしかめようと、早速追跡すると、彼女は屋上への階段をかけ足で登っていって、一面に果てしなく広がる焼野が原に対して劇しい慟哭をされた。滅多に愚痴をこぼさず、きりっと歯をくひ縛って、威厳を保っていた光明先生がそんなにもはげしく泣かれたということは私を大変に驚かせた。

そういえば、鶴来先生や中沢先生の戦災死のニュースにも涙をこぼす余裕もない程に、私達は毎

日死と隣り合わせに暮して来た。しかし終戦を境に死んだ人々は今ようやく私達から遠ざかってゆこうとしている。“さようなら！　可哀そうな人達”と心に叫んだ時、私の頬にも、遅蒔ながら涙が滂沱と伝って来た。

この年は決戦態勢なので夏休もなかったが、終戦でひとまず、九月の新学期迄お休みということになった。厚木の飛行場で反乱がおき、沢山の軍用機が東京上空を狂ったように飛んだり、宮城前で集団自殺をする人々が現われたり、敗戦が民衆に馴染むためには、なお沢山の犠牲が要求されたが、壕の中に埋めた衣類を堀り上げて日に乾したり、花小金井の農場に食糧を買い出しにいったりして多忙な私達には全く関係のないことだった。

学校が借りていた花小金井の農場の附近は、サツマイモや夏野菜の畑作地帯で、戦局が悪化して生徒達を引卒して農作業に出かけることの不可能になった昭和１９年後半からは、専らそこが先生方の買出しの唯一のルートになり、どんなに助かったか判らない。一週間に少くとも一度は出かけてゆくが、六貫目（２４キロ）のサツマイモを背負って満員の電車を降りる時、高田馬場のフォームの下に下駄を片方落して帰ったこともあった。丁度その休暇中に、校庭に附近の焼跡からドラムカンを転がして来て手作りのカマドの上にのせ、お風呂を湧かしてくれた先輩もいる。焼跡の防空壕改造のそんな小屋の屋根には、カボチャの蔓が這っていて、所々に宝物のように大きな実がついたものだ。

九月早々学校は授業を再開したが、東部軍聯隊司令部は残務整理のために残っていたし、その上罹災校の府立第三高女が三階に入って来た。府立第三は麻布の名門校で、英和の生徒の中には第三の落武者もいたから、これは又立場が逆転した形で何とも妙な具合だった。屋上に焼夷弾が落ちても炎上しないですんだ鉄筋校舎の実力をこの時程感謝したことはない。新学期と同時に生徒達は続々と疎開先から帰って来て再会を喜びあった。どこでどう工面をするのか、彼女達はもはや国民服をすてて、黄色のラインにガーネットのネクタイの制服に戻りつつあったし、これも国民服から脱兎の如く白線に紺のネクタイのセーラー服に早変りした府立第三の生徒と玄関を異に出入する光景は誠に珍しかった。私達は長野先生や光明先生のもとで実に楽しく生き生きと働いた。幸運にも学校を離れず同志として死生を誓った仲であったし、民主々義という新しい旗印しのもとで自分の思っている事を誰にも遠慮せずに喋れるということが、自分自身の中に定着しつつあったようだ。

１２月のクリスマスに、メーテルリンクの“青い鳥”を、私の演出で、チルチルが２年生の梨本さんミチルが１年生の武内さん、光が４年生の富田さん、犬が３年生の萩原さんその他全学年から参加の配役で上演した。皆が貧窮のドン底にいた頃一番の手っとり早い慰めは、自分達で芝居をして、仲間のする芝居を見物することだった。英和の生徒は講堂の一階に、府立第三高女の生徒は二階に着席して、実に感慨深げに“青い鳥”を見物したのであった。府立第三の生徒の中に、この“青い鳥”にすっかり感動し、翌年４月英和に転校して来た人が一人いる。少女ながらも、天晴れな決意であると教員室中の評判になった。

最近収集した資料から

○長野県上田市・梅花幼稚園保母伝習所（現短期大学保育科の前身）時代の授業の一部
恩物筆記、折紙、たたみ紙、縫い取り、きり紙、

○スライド　短期大学保育科の歴史（保育部会作成）　大正５年ー昭和４８年

○制帽　昭和初め女学科の制帽

○明治３０年代寄宿生の小使い帳、成績表その他

○ピアノ科卒業リサイタル、写真、プログラム、成績表

○陶器、ミス・ハミルトン御愛用のもの

前号（第三号）の第三頁の写真の御名前に間違いがありました。御詫びと共に下記の通り訂正させて頂きます。

前列左から
長野現名誉院長・岩原（筆者）・岡本(あ)・平岩（旧川上）・矢川・村井（旧小林）・光明現院長

中列　富士・岡　・小川（旧山田）・清水（旧前田）・渡井（旧佐々木）

後列　加々美（旧清水）・中木・上田（旧倉長）川島・松島

～～～＊～～～＊～～～＊～～～＊～～～＊～～～＊～～～＊～～～＊～～～＊～～～

次の数え唄を覚えていらっしゃる方はありませんか？（ひとつとやの節で歌ったものです）

1. ひとつとやー、ひとりの神より神はなし
　　み名をエホバと申すなり　申すなり
2. ふたつとやー、不動　○○　地蔵尊
　　形のあるものおがむなよ　おがむなよ
3. みっつとやー、みだりにエホバの名を云うな
　　神のみまえに罪となる　罪となる

４節以下の言葉を御存知の方は係までお知らせ下さいませ。

あとがき

猛暑の夏休中、皆様御元気にお過しになりましたか？　八月は戦争体験者にとっては格別の感慨を呼び起す時ですが、岩原先生の原稿もその前後の厳しさと、云い表わし様のない心の葛藤が訴えられて、現代の私達の生き方に一石を投じられる思いです。二号にわたって御執筆下さいました事を有難く存じます。

史料室委員会は本年は出足が遅く、六月に発足致しましたので、史料室だより第四号も漸く夏休み直前の編集となりました。今年度は“資料集”の刊行を予定しております。

（中高部・朽木・沓沢・栗原・中野記）